

第98回 三方限古典塾（'14,12,18）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3－15）

- 1 群疑ぐんぎに因よりて独見はばを阻なかむこと母おのれれ。己の意に任せて人の言を廢すること母れ。
小恵しょうけいを私わたくしして大体やぶを傷ること母れ。公論を借りて私情こころよを快くすること母れ。

前集 131

（意識） 大ぜいの人々に支持されないからといって、自分の意見を軽々しく変えてはならない。自分の意見にこだわるあまり、他人の意見を無視してはならない。小さな私的な恩恵を売って、人類全体や国全体など対局の判断を見失ってはならない。世論やマスコミなどの力を借りて、個人的な腹いせをしてはならない。

（余説） どれもが人間学の至言です。一と二は相矛盾しており、難しいことを求めています。何れも過ぎないことが肝心だと理解します。それが儒教の中庸、仏教の中道、ほどほどの加減です。「小恵を私して大体を傷る」例は、政治家や官僚などが小さな利益に目がくらんで大局を誤り、国益を損なうこともあり、要注意です。そのようなことは決してしてほしくないものです。また、最近ではインターネットの匿名性を悪用して、特定の個人を誹謗中傷・攻撃するような新たな問題も起きています。

（参考） 六然訓句

「超然ちょうぜんとして天に任す。悠然ゆうぜんとして道を楽しむ。巖然げんぜんとして自らを肅しむ。
藹然あいぜんとして人に接する。毅然きぜんとして節を持する。泰然たいぜんとして難に處する」

- 2 父は慈、子は孝、兄は友、弟は恭きようたり。縦い極た処きよくしよに做し到るも、俱なに是れ合当とも
に此の如くなるべく、一毫の感激の念頭も着け得もざれ。如し施す者は徳に任じ、受
くる者は恩を懐おもわば、便すなわち是れ路人にして、便すなわち市道と成らん。 前集 134

（意識） 親は子を慈しみ、子は親に孝養をつくす。兄は弟をいたわり、弟は兄をうやまう。これは肉親としてきわめて当然の情愛である。たとえこれらのことが理想的な状態で行われたにしても、感謝したり感謝されたりする筋合いのものではない。もし、そのことで恩着せがましい態度をとったり、施しを受けたという意識を抱いたならば、それは他人同士の関係となり、利益関係で成り立つ世間的な商取引きと変わりがない。

（余説） 肉親の間に生ずる細やかな情愛は、動物として本能的なものであらうと思います。「恩」とは、ギブ・アンド・テイクの関係に立脚するものですが、親が子を育てるのは「無償」の行為です。もっとも昨今ではそれが疑われるような悲惨な事件も起きています。当然ながら「兄弟は他人の始まり」というように、そこには濃淡の差があります。儒教では、親子関係が君臣など他のすべての関係に優先させます。

私たちはともすると「あんなに〇〇してやったのに」と考えがちです。ここから学べべきは、感謝される側ではなく、感謝の念を示すべき側の心得です。

現今の世情から見ると、人も組織も国も、ともすれば自己中心的になりがちな要素をその内に秘めているのが現実であると思わざるを得ません。

（参考） 礼記（礼運）「父は慈、子は孝、兄は良、弟は弟」

五倫の教え「父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り」

3 炎涼の態は、富貴にありて貧賤よりも更に甚しく、妬忌の心は、骨肉にありて外人よりも尤も狠し。此の処、若し当るに冷腸を以てし、御するに平氣を以てせずば、日として煩惱障中に坐せざること鮮し。

前集136

(意識) 人情の暖かさや冷たさがころりと変わりやすいのは、金持ちで身分の高い者の方が、貧乏で身分が低い者よりも激しい。また、妬む心や嫉む心は、肉親への場合がアカの他人への場合よりもひどくなる。このことを常に心に置いて、冷静で穏やかな心をもって当たらないと、毎日を苦しみと煩わしさの中で過ごさねばならなくなるだろう。

(余説) この論に納得できる現実も少なからずありますが、中国春秋の管仲の言葉「衣食足りて礼節を知る」や「貧すれば鈍する」のように、貧賤の人が必ずしも清く正しくないのは、世界の状況や歴史上の事実で感じられます。

また、妬む心や嫉む心も、肉親の場合は自分との共通点が多いだけに、この論に納得できることもありえます。この嫉妬の念は子供から年寄りまで自然にあり、人の持ついろいろな感情の中で一番厄介だと言われます。昔、母から薩摩弁で「しょのんごろ(よく嫉む者)は見苦しかもんじゃっど」と戒められたものでした。人は、相手の幸福度が上がると相対的に自分の価値が下がると錯覚するものなのではないでしょうか。そのような戒めを念頭に置いて、そうならないように日頃から気をつけたいものです。

4 己を反みる者は、事に触れて皆薬石と成り、人を尤むる者は、念を動かせば是れ戈矛なり。一は以て衆善の路を闢き、一は以て諸悪の源を濬くす。相去ること霄壤なり。

前集 147

(意識) 自分を反省する者にとっては、体験することのすべてが自分自身にとって良薬となるが、人の失敗を責めてとがめる者は、心を動かすたびにそれが自分を傷つける凶器となる。前者は諸々の善行を積む道を開くが、後者は様々な悪事を重ねる源を深くすることになる。両者には天地雲泥ほどの差がある。

(余説) 何かにつけて、まず自分を厳しく省みる人と、他者のアラや欠点を探そうとする人との違いが天地雲泥ほどの差を生じさせるとすれば事は重大です。

東郷平八郎元帥や多くの皇族・大臣・実業家が人生の師と仰いだ中村天風は、その著“叡智のひびき(講談社)”で「内省検討ということは、須く我執を離れて行うべし。そうしないと往々独善に陥る。(155p)」「何人と雖も反省を人に強いる権利はない。反省というのは自分自身を、肅やかに為すべきものである。(161p)」と書いています。

己を省みるということも、とにかく自分本位になりやすく、実際はなかなか難しいものだと思います。評論家の小林秀雄は「教養とは、反省である」と言い切っているようですが、まず自らを反省してみる習慣を心の漢方薬にしたいものです。

(参考) 法句経(183句)「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」

(ありとある 悪を作さず ありとある 善きことは 身をもって行い
おのれの心を 清めんこそ 諸仏のみ教えなり)

道元・正法眼蔵(画餅・93p)「諸悪莫作、衆善奉行と道取するがごとし」

マタイによる福音書(7-1)「人を是非することなかれ、さらば汝らも是非せられじ」